

アーリーバードプラスプログラム

TOMOはうす

〒781-2110 高知県吾川郡いの町 6406-4

助成事業の概要

【目的】

- (1) 保護者や支援者が自閉症スペクトラムをもつ子どもへの養育力を高める。
- (2) 保護者と支援者が一緒にトレーニングを受けることで、家庭と園・学校との一貫した支援を促す。
- (3) 自閉症児がよりよい支援を受けることで、成功体験を積み自信と意欲を向上させていく。

【時期】 当初の予定では 2 コース実施する予定であったが、コロナ感染拡大のため 2 学期コースのみ実施した。10/8～3/4(説明会 1 回、セッション 8 回、家庭訪問 2 回、フォローアップ)

【内容】

- (1) 子どもの自閉症の特性を理解する
- (2) 子どもとのコミュニケーションがよりよく図れるようにする
- (3) 問題行動に対して先手を打つ対応や問題行動が起こっても対処できる方策を身につける

事業の成果

今回の参加者は、コロナ禍ということもあって 2 家庭と少なかった。しかしどちらの家庭もお子さんへの対応に苦慮し、心身の健康を損ねている保護者もおり、子ども・保護者への支援が緊急を要する状況でのスタートだった。

セッションが進むにつれ、自閉症の特性を正しく

理解することで保護者の対応が変わり（短い言葉で話す、視覚支援を使うなど）お子さんと肯定的な関わりができるようになっていった。同時に、問題行動の原因を分析できるようになり、お子さんの問題行動が激減したり、問題行動そのものを未然に防いだりすることもできるようになった。このように学び続けることが保護者の自信向上、健康回復にも繋がっていった。

セッションの途中には、必ず参加者どうしの話合いの時間を確保した。自閉症の子どもを育てる困難さについて共感しあい、我が子に取り組んだ視覚支援等を紹介しあう場面では、それぞれの家庭が興味関心を示し、お互いの支援の引き出しが増えた、と喜びの声が聞かれた。

ある家庭のお子さんは寄宿舎を利用しており、このプログラムに担任教員と寄宿舎担当教員が交代で参加した。プログラム受講前の保護者は、家庭と学校での子どもの姿が全く違っており、お互いが理解しあえていない、と学校との連携について悩みを抱えていた。それがこのプログラムを支援者と一緒に受講することで、子どもへの理解が進み、家庭での困り事を解決するために学校ができることを共に話し合いながら取り組んでいけるようになった。毎回終了後にとるアンケート結果は、「大変役に立った」「役に立った」というものがほとんどであったが、最後のフォローアップでは「今まで何をやってもうまくいかなかったので、半ば諦めていたが、学ぶことで人生が変わった！」という感想が出された。

成果の広報・公表

今年度は 13 箇所の保育・教育関係の機関で、主に「発達障害のある子どもの理解と支援」について講演を行った。また、このプログラムを参考に支援者向けの「自閉症サポート講座」も開催している。これらの場で、このプログラム受講者の声や成果を紹介してきた。

また『第 48 回日本コミュニケーション障害学会 学術大会 in 愛媛大学』(2022 年 5/28～29)にて、2019 年度からスタートしたこのプログラムについて、受講者のアンケート結果をもとに成果と課題について発表した。

2023 年度 TOMO はうす第 1 回オンライン学習会 (4/16) では、今年度受講者が登壇し、これまでの子育ての苦勞やプログラムを学んでからの、両親や子ども、家庭全体、そして学校との連携の変化について発表する予定である。

今後の展開

2019 年度からスタートしたこのプログラムは、今年度の受講者が 6 期生となる。共に学ぶことで「この繋がり、支え合いをこれで終わりにしたくない。」という声が毎回上がり、「親・支援者の会」が 2021 年秋に発足した。これまで定期的に例会を行ってきたが、学校や担任が変わるたびに、その連携の難しさが浮き彫りになっていた。そこで、自閉症の正しい理解について広く一般の方たちにも伝えていくため、「親・支援者の会」の有志で実行委員会を結成。世界自閉症啓発デー (4/2) に『こせいにあわせた くふう展』を高知 蔦屋書店で開催することにした。準備を進める中で、自閉症そしてお互いの理解が深まっていることが感じられる。今年度は、コロナ感染拡大防止のため実施コースを減らし受講者も少なかったが、多くの方にこのプログラムを届けるために、

今後は広く広報活動を行っていく。そして受講者自らが発信するイベントを通して、自閉症理解の普及に努めていきたい。